

正法眼蔵

弁道話に参ずる

金子勝俊

正法眼蔵

現代語 正法眼蔵

弁道話

仏道修行の話

諸仏如来、ともに妙法を単伝して、阿耨菩提を証するに、最上無為の妙術あり。これただ、ほとけ仏にさづけてよこしまなることなきは、すなわち自受用三昧、その標準なり。

この三昧に遊化するに、端坐參禪を正門とせり。この法は人人の分上にゆたかにそなわれりといへども、いまだ修せざるにはあらわれず、証せざるにはうるることなし。はなてばてにみてり、一多のきはならんや、かたればくちにみつ、縦横きわまりなし。諸仏のつねにこのなかに住持たる、各各の方面に知覚をのこさず。

お釈迦様、如来、菩薩など様々な名前で呼ばれ、何処にでもおられる仏様は遠い昔からこの先もずっとそれぞれがその弟子に尊い真理を受け嗣いで、そしてそれぞれがその無上なる真理への目覚めを実証している。私達がその真理を實現するのにこれ以上ない完璧なる方法、仏様がその弟子に正しく真理を伝えてきたその方法とは自受用三昧といい、真理に浸りきつてその美味を享受するのである。

この真理を享受する正面の入口は坐禪修行である。真理というものは人々の身体に豊かに備わっているのであるが、それは修行しなければ現れず、実証してみなければ得られない。放り出してみると手の中に満ちていて多いも少ないもない、声に出してみると口の中に満ち溢れていて自由自在である。仏様や祖師方たちは常にこの真理を自己のものとしていて、

群生ぐんじゆうのとこしなへにこのなかに使用する、各各の知覚ちかくに方面ほうめんあらはれず。

いまをしふる功夫辨道くわぶんどうは、証上しやうじやうに方法をあらしめ、出路しゅつろに一如いちにょを行ずるなり。その超関脱落ちやうかんだつらくのとき、この節目せつもくにかかはらむや。

予、発心求法ほつしんぐほうよりこのかた、わが朝の遍方へんぽうに知識をとぶらひき。ちなみに建仁けんんにんの全公ぜんこうをみる。あひしたがふ霜華しやうかすみやかに九廻きゅうかいをへたり。いささか臨済りんさいの家風かふうをきく。全公は祖師そし西和尚さいおしやうの上足じやうそくとして、ひとり無上の仏法ぶつぽうを正伝しやうでんせり。あへて余輩よはいのならぶべきにあらず。

予かさねて大宋国たいそうこくにおもむき、知識ちしきを兩浙りやうせつにとぶらひ、家風かふうを五門ごもんにきく。つひに大白峰たいはくほうの淨禪師じやうぜんしに參じて、一生參学じゆうさんがく

あらゆるものに執着しやくちやくしない。私達わがたちはいつもこの真理しんりの中に生きているにも関わらず、知覚ちかくや分別ぶんべつばかりに振り回されて本當ほんたうの自分おのれが見えていない。

ここで教えようとする坐禪修行ざぜんしゆぎやうは真理しんりの上に一切いっけつを現あらわし、人生じんじゆうを真実しんじつとを一体いつたいのものとするのである。それによつて束縛そくわくから離れる時、人の身分しんぶん、肩書かたがきなどどうでもよいものとなる。

私は真理しんりを求める決心けつしんをしてからこの方かた、日本の至る所に師しを求め訪ね歩いた。そして建仁寺けんんにんじの明全和尚めいぜんおしやうに会い、それから九年くわんねんの月日げつじつが流れ、多少たうしやうなりとも臨済りんさいというものを覚えた。明全和尚めいぜんおしやうは祖師そし榮西えいせいの高弟たうていとして、ただひとり最高の仏法ぶつぽうを受け継いでいて、それは他の弟子でしの及ぶところではなかった。

私はさらに宋そう（中国）に渡り、師しを求め浙江しやうきやう（浙江省）の兩岸りやうあんにある五山十刹ごさんじゆしやくを訪ね、法眼ほふがん、瀉仰しゃやう、雲門うんもん、臨済りんさい、曹洞そうどうの五宗ごしゆうの教えや流儀りゆうぎを学んだ。そしてついに天童山てんどうざんの如淨禪師にょじやうぜんしに參じて、これまでの疑念ぎねんが解消げいしゆうし一生じゆうじゆうを貫く修行しゆぎやうに邁進まいしんする

の大事ここにをはりぬ。それよりのち、大宋紹定のはじめ、本郷にかへりしすなはち、弘法救生をおもひとせり。なほ重担をかたにおけるがごとし。

しかあるに、弘通のころを放下せん激揚のときをまつゆゑに、しばらく雲遊萍寄して、まさに先哲の風をきこえむとす。ただし、おのずから名利にかかはらず、道念をさきとせん真実の参学あらむか。いたづらに邪師にまどはされて、みだりに正解をおほひ、むなしく自狂に多うて、ひさしく迷郷にしづまん、なにによりてか般若の正種を長じ、得道の時をえん。貧道はいま雲遊萍寄をこととすれば、いづれの山川をかとぶらはむ。これをあはれむゆゑに、まのあたり大宋国にして禅林の風規を見聞し、知識の玄旨を稟持せしを、しるし

決意を固めることができた。それから、一二二八年の初めに日本に帰り、この妙法を広めたいと考えたが、それはかなりの重荷を背負うものとなつた。

そうは言うものの真の仏法を弘めるには時期尚早であり、はやる気持ちを抑え、期が熟すのを待つこととし、しばらく浮草の如く放浪し先人の教えを学ぶことにした。しかし一人の修行僧がいて自分の名利に関わることなく一心に仏道を究めようとしていたらどうなるであろうか、いたづらに邪教徒に惑わされて、思慮もなく正しい理解から外れ、独善に陥つて、長いこと誤りの道を彷徨つてしまうのではないか、何によつて真の教えの種を大事に育て、道を得るのか。私は今浮草の如き放浪の身であれば、彼らは一体何処の誰を訪れ、真の仏法を尋ねたら良いのであろう。このような事態を憂慮して、私が実際に宋(中国)の禅寺の修行の有り様を見聞きし、先人の奥深い教えを自分のものとしてきた本旨を書き残して、道を究めようとしている修行僧に書き残して正当なる仏法を

あつめて、參学閑道かんどうの人にのこして、仏家の正法をしらしめんとす。これ真訣しんけつならむかも。

いはく、大師釋尊しやくそん、靈山会上りやうざんえじやうにして法を迦葉かじやうにつけ、祖祖正伝して、菩提達磨尊ぼだいだるま者にいたる。尊者、みづから神丹国しんたんこくにおもむき、法を慧可大師えかにつけき。これ東地の仏法伝来のはじめなり。

かくのごとく単伝たんてんして、おのづから六祖大鑑禪師だいかんぜんじにいたる。このとき、真実の仏法まさに東漢とうわんに流演るえんして、節目せちぶくにかかはらぬむねあらはれき。ときに六祖に二位にじの神足じんそくありき。南嶽なんがくの懷讓えじやうと青原せいげんの行思ぎしゆしとなり。ともに仏印ぶつちんを伝持でんぢして、おなじく人天にんてんの導師だんしなり。その二派にっはいの流通るつうするに、よく五門ごもんひらけたり。いはゆる法眼宗ほっげんしゆ、漚仰宗いげいしゆ、曹洞宗そうどうしゆ、雲門宗うんもんしゆ、臨濟宗りんじしゆなり。見在けんざい、大宋

伝えようと思う。これこそが仏道の本当の奥義おくぎというものかもしれない。

このように言われている、お釈迦様は靈鷲山の山上での集いにおいて、法を摩訶迦葉尊者まかかじやくそんに伝授し、それが正しく受け継がれて達磨大師だつまに至っている。大師は自ら中国に赴き、法を慧可大師えかに嗣すいいだ。これが東方の国への仏法伝来の初めなのである。

このように法がそっくりそのまま一人から次の一人へと伝わり、達磨大師から六番目の六祖大鑑慧能禪師だいかんえいねんぜんじに至る。ここに至って初めて真実の仏法が中国全土に広まり、教学てがく仏法ぶつぽうに依らない教えが現れたのである。その六祖に二人の高弟たうていがあつた。南嶽懷讓なんがくえじやうと青原行思せいげんぎしゆしである。二人とも仏法の印可いんかをもち、同じように大衆を導く導師だんしであつた。その二派にっはいの系統けいけうが世間に行き渡り五門ごもんが興つた。すなわち法眼宗ほっげんしゆ、漚仰宗いげいしゆ、曹洞宗そうどうしゆ、雲門宗うんもんしゆ、臨濟宗りんじしゆである。現在の中国では臨濟宗のみ栄えている。その五宗の宗風しゆふうは異なっているが、仏法の正し

には臨済宗のみ天下にあまねし。五家ことなれども、ただ一仏心印なり。

大宋国も後漢よりこのかた、教籍きょうじやくあどをたれて一天にしけりといへども、雌雄いまださだめざりき。祖師西來ののち、直じきに葛藤の根源をきり、純一の仏法ひろまれり。わがくにも又しかあらむ事をこひねがふべし。

いはく、仏法を住持じゆうぢせし諸祖ならびに諸仏、ともに自受用三昧じじゆうざんまいに端坐依行するを、その開悟のまさしきみちとせり。西天東地、さとりをえし人、その風ふうにしたがえり。これ、師資ししひそかに妙術を正伝し、真訣しんけつを稟りん持せしによりてなり。

宗門の正伝にはく、この単伝正直しんぜんぢきの仏法は、最上のなかに最上なり、參見知識さんけんちしき

い印を伝えていることについては紛れもない。

現在の宋(中国)も後漢(二五〇二二〇)の時代よりこの方、經典を規範として、仏教が天下に流布されていたが、どの教えが優れているか雌雄を決するまでには至っていなかった。達磨大師が中国にやって来た後、すぐに混乱の根が断ち切られ、純粹な仏法が弘まった。日本もまたこのようになることを願うばかりである。

このようにも言われている。仏法を自分のものとして、お釈迦様を初めとする祖師方はいずれも自受用三昧即ち真理に浸ってその美味を享受することを坐禅によつて実現し、悟りの第一歩としたのである。インドと中国において悟りを得た人々はその様にしてきた、これは師と弟子が親しく坐禅という方法を伝授し、正しい教えを受け継いできたからに他ならない。

達磨大師の伝える法はこう言われている。一人の師から一人の弟子にそっくりそのまま伝わった仏法は最上のなかにも

のはじめより、さらに焼香礼拝念仏修懺しゆせん看經かんきんをもちあらず、ただし打坐たざして身心脱落だつらくすることをおえよ。

もし人、一時なりといふとも、三業に
仏印ぶつちんを標し、三昧さんまいに端坐たんざするとき、遍法界へんほつがい
みな仏印ぶつちんとなり、尽虚空じんこくうことごとくさと
りとなる。ゆゑに、諸仏如来しよぶつにらいをしては本地の
法樂ほつらくをまし、覺道の莊嚴じやくどうのじやうげんをあらたにす。
および十方法界じつぱうほつがい、三途六道さんずろくどうの群類ぐんるい、みなと
もに一時に身心明淨しんじんみようじやうにして、大解脱地だいげだつちを
証し、本来面目ほんらいのめんもく現あるとき、諸法しよほふみな
正覺しやうかくを証會しやうえし、万物ばんぶつともに仏身ぶつしんを使用し
て、すみやかに証會しやうえの辺際へんさいを一超いちじやうして、
覺樹王かくじゆおうに端坐たんざし、一時に無等等むとうとうの大法輪だいふりんを
轉まじ究竟無爲きぎやうむゐの深般若じんはんにやを開演かいえんす。
これらの正覺しやうかく、さらにかへりてした
しくあひ眞資みよしするみちかよふがゆゑに、

最上の教えである。指導者にまみえての初めから、香を焚く、
礼拝する、仏を念ずる、懺悔する、お経を読む、などは必要
なく、ただ坐禪をして身心脱落すればよいのである。

もし人がほんのわずかの時間であつても身体、言葉、心の
活動である三業に仏法の印を現わしてただひたすら坐禪する
とき、この世界が全て仏法の現れとなり、あらゆるものが悟
りそのものとなる。それ故、仏たちは眞実の世界を享受し、
厳かな悟りにさらに悟りを重ねるのである。そしてこの世の
あらゆる生きとし生けるものが皆ともに、一齊に淨らかな身
心をもつて、一切の執着を断ち切り、本来の自分を見出す、
その時あらゆる有情無情の仲間たちは全て悟りを得、悟りの
身を以てただちに、悟りの境界を飛び越えて、お釈迦様と同
じ菩提樹の下で坐禪し、同時に比類のない大説法をもつて衆
生を導き、さらなる仏の智慧を展開するのである。

これらの有情無情の仏たちはさらに自己を省みつつ互いに
親しく交感することになるので、この坐禪人はしっかりと自
己の執着を断ち切ることができ、それまでの汚れた分別を

この坐禪人、確爾かくにとして身心脱落し、從來じゅうらい雜穢ぞうえの知見思量を截斷して、天真の仏法に証会し、あまねく微塵際そこばくの諸仏如来の道場ごとに仏事を助発し、ひろく仏向上の機にかうぶらしめて、よく仏向上の法を激揚す。このとき、十方法界の土地草木、牆壁瓦礫みな仏事をなすをもて、そのおこすところの風水の利益にあづかるともがら、みな甚妙不可思議の仏化に冥資せられて、ちかきさとりをあらはす。この水火を受用するたぐひ、みな本証の仏化を周旋するゆゑに、これらのたぐひと共住して同語するもの、またことごとくあひたがひに無窮の仏徳そなはり、展転広作して、無尽、無間斷、不可思議、不可称量の仏法を、遍法界の内外に流通するものなり。しかあれども、このもろもろの当人の知覚に

取り払い、天然真実の仏法を自分のものとし、あらゆるものに仏の説法を及ぼし、仏が仏を求め、悟りがさらに悟りを求めるようになるのである。この時、この世の中の土地、草木、小石、瓦礫などのあらゆる事物はすべて仏の現われとなり、その仏がもたらす自然の利益を享受する仲間たちは、みな妙なる不思議な導きによつて自分に相応しい悟りを見出すのである。この自然を享受する事物は、それぞれに備わっている仏性をもれなく周囲に及ぼしているので、これ等の事物と共存し、心を通わせている事物もことごとく、互いに無限の仏徳が備わり、次から次へと広く仏のハタラキをもたらし、尽きることなく、休みなく、思い巡らすことも出来ないほどの、また量ることが出来ないほどの真理の教えをこの世界に満遍なく行きわたらせるのである。

ところが、この悟りは坐禪人たちの分別の対象にはならない、それは坐禪がそのまま悟りの証だからである。

昏ぜざらしむることは、静中の無造作にして直証なるをもてなり。もし、凡流のおもひのごとく、修証を兩段にあらせば、おのおのあひ覚知すべきなり。もし覚知にまじはるは証則にあらざ、証則には迷情およばざるがゆゑに。

又、心境ともに静中の証入悟出あれども、自受用の境界なるをもて、一塵をうごかさず、一相をやぶらず、広大の仏事、甚深微妙の仏化をなす。この化道のおよぶところの草木土地、ともに大光明をはなち深妙法をとくこと、きはまるるときなし。草木牆壁は、よく凡聖含靈のために宣揚し、凡聖含靈はかへつて草木牆壁のために演暢す。自覚覚他の境界、もとより証相をそなへてかけたることなく、証則おこなはれておこたるときなからしむ。

もし凡人が思うように、修行と悟りが階段を上るように修行があつて次に悟りがあるものだとするれば、それらは互いに把握できるはずである。そもそも把握出来るとするればそれは悟りというものではないだろう、悟りというものは迷いの心で到達できるようなものではないのだから。

又、坐禅中に心も、心に描くその対象も共に、悟りに入つたり出たりするが、そのような往来があつても、真理を享受している自己であるが故に、些かの塵を動かすような動揺もなく、姿、形を変えることもない。広大な真理の世界はこの上なく深い妙なる境地への導きである。この教えが及んでいくにつれ、草木、土地は共に大きな光を放ち、また深く妙なる法を説くこと限りがないのである。草木垣壁などの非情のものは生きとし生ける有情の為に真実の法をはつきりと示し、生きとし生ける有情は却つて草木垣壁などの非情のために真理を語る。自ら悟り、他を悟らしめるこの世界は本来悟りの姿を備えていて欠けることなく、またその悟りの規範が実現していて止まる時がないのである。

ここをもて、わづかに一人一時の坐禅なりといへども、諸法とあひ冥し、諸時とまどかに通ずるがゆゑに、無尽法界のなかに、去来現に、常恆の仏化道事をなすなり。彼彼ともに一等の同修なり、同証なり。ただ坐上の修のみにあらず、空をうちてひびきをなすこと、撞の前後に妙声綿綿たるものなり。このきはのみにかざらむや、百頭みな本面目に本修行をそなへて、はかりはかるべきにあらず。

しるべし、たとひ十方無量恆河沙数の諸仏、ともにちからをはげまして、仏智慧をもて、一人坐禅の功德をはかりしりきはめんとすといふとも、あへてほとりをうるのとあらず。

それ故、一人の者のたとえひと時の坐禅であつても、それは諸々の自然との交感であり、時の流れを自己の内に捉え、時それ自体を味わうことになるが故に、過去現在未来に亘る永遠なる全宇宙ぐるみの仏道の展開なのである。どのような坐禅であつてもそれらはみな同じ修行であり、又同じ悟りなのである。それは坐禅修行の上だけのことではない。空を打つて音が響き渡る仏道の実践、棒で鐘を打てば余韻が残るとしても、打つ前から既に鐘の響きが漂っている真実の展開。

この展開は坐上や鐘の音に限ったことではない。あらゆるものが本来のあるべき有り様を保ちながら真剣に修行するものだから、その功德は量り知れないものとなるのである。

よく心得ておくがよい、例えあらゆる方角におわします無数の仏が一緒になり仏の智慧を使つて、一人の者が行っている坐禅の功德を計り、知り究めようとしても、その広大な功德の際限を知ることなど出来ないものである。

いまこの坐禪の功德くどく、高大なることをきき聴をはりぬ。おろかならむ人、うたがうていはむ、仏法におほく多の門あり、なにをもてかひとへ偏に坐禪をすすむるや。

しめしていはく、これ仏法の正門しょうもんなるをもてなり。

とうていはく、なんぞひとり正門しょうもんとする。

しめしていはく、大師釋尊だいししやくそん、まさしく得道の妙術しょうじゆつを正伝しょうでんし、又三世の如来、ともに坐禪より得道とくどうせり。このゆゑ故に正門しょうもんなることをあひつたへたるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖あいてんとうち、みな坐禪より得道とくどうせるなり。ゆゑにいま正門しょうもんを人天にんてんにしめす。

とうていはく、あるいは如来の妙術みょうじゆつを正伝しょうでんし、または祖師そしのあとをたづぬるによ

【第一問】今、この坐禪の功德が素晴らしいものであることを聴き理解したところである。しかし愚かな人は疑つて言うであろう、仏法には多くの入口がある、何をもつてただ坐禪のみを勧めるのであるのかと。

答えて言う、これは仏法の正門であるからである。

【第二問】質問する、何故、坐禪だけが正門なのか。

答えて言う、釈迦牟尼仏はまさしく悟りを得るための方法を正しく弟子に伝え、また過去現在未来の如来も同様に坐禪によつて悟りを得た。この故に正門であることを代々伝えてきたのである。そればかりではなく、印度、中国の高僧の方々は皆坐禪によつて悟りを得ている。故に今、これが正門であることを人々に示すのである。

【第三問】質問する、仏様が悟りを得た坐禪という方法が正しく伝授されており、また祖師の方のその足跡を訪ね調べあげ

らむ、まことに凡慮ぼんりよのおよぶにあらず。しかはあれども、誑ごまか念ねん仏ぶつはおのづからさとの因縁いんげんとなりぬべし。ただむなく坐してなすところなからむ、なによりてかざとりをうるたよりとならむ。

しめしてはいはく、なんぢいま諸仏しよぶつの三昧さんまい、無上の大法だだいほうを、むなく坐してなすところなしとおもはむ、これを大乘だいじやうを誘まよずる人とならむ。水みづなしといはむがごとし。すでにかたじけなく、諸仏しよぶつ自受用じじゆう三昧さんまいに安坐あんざせり。これ広大こうだいの功德こうどくをなすにあらずや。あはれむべし、まなこいまだひらけず、こころなほ多おほひにあることを。

おほよそ諸仏しよぶつの境界きやうがいは不可思議ふかぎなり。心識しんしきのおよぶべきにあらず。いはむや不信しんしんの劣智りやくちのしることをえむや。ただ正信しやうしんの

た上でそのように言われているのであるから、それは平凡な人間には考える必要もないことではある。しかしながら、お経を読んだり、念仏を唱えたりすることもそれ自体悟りを得る一つの手段ではないだろうか、ただ無意味に坐って、何もしない、それで本当に悟りを得ることになるのだろうか。

答えて言う、おまえさんはいま悟りを得た後さらに坐禅修行を続けて真理を享受するという無上なる仏法を見て、ただ意味なく坐っているものと思うであろう、これは大乘仏教を誘まよるものである。その惑いは非常に深く、大海の中にいなから水がないと言っているようなものである。坐禅するということは既に悟りを得た人と同じ自受用三昧じじゆうさんまい(真理に浸ひり込んでその美味を享受する心地)に入るといふ誠に有りがたいことなのである。これが大いなる功德でなくして何だろうか。これを理解できないでは悲しむべきことである、真実が見えず心はずつと無明に酔よっているのである。押し並べて、悟りの世界は不思議である。思いがおよぶようなところではなく、まして仏法を信ずる智慧のない者が分かるものではない。

大機だいぎのみ、よく入いることをうるなり。不信の人は、たとひ教をしふともうくべきことかたし。靈山りょうせんになほ退亦佳矣たいやくけいのたぐひあり。おほよそ心に正信しょうしんおこらば修行し参学すべし。しかあらずは、しばらくやむべし。むかしより法のうるほひなきことをうらみよ。

又、誑經念仏等のつとめにうるどころの功德を、なんぢ汝しるやいなや。ただしたをうごかし、こゑ声をあぐるを、仏事功德ともへる、いとほかなし。仏法に擬するにうたたとほく、いよいよはるかなり。又、經書きょうしょをひらくことは、ほとけ頓漸修行の儀則ぎそくをしへおけるを、あきらめしり、教のごとく修行すれば、かならず証しょうをとらしめむとなり。いたづらに思量ねんたく念度をつひやして、菩提ぼだいをうる功德に擬せんとにはあ

い。ただ不思議の世界をそのまま信じていることができる者のみが悟りに入ることが出来るのである。不信の者は仮に教えても受け入れることができない。釈尊が靈鷲山で経を説こうとした時に驕れる人々が聞くに及ばぬと言つて退席したという逸話えつわもある位である。おほよそ仏法を信ずる心が起つたら、修行参学すればよい、そうでなければ暫く止めるべきである。その間は前から法の恵みがなかつたのだと諦めることだ。

また経を読み、念仏を唱えるなどの勤めをして得られる功德をおまえさんは知っているだろうか。ただ舌を動かし、声を上げるのを仏事の功德だと思っている。これは虚しいことである。仏法だと思つてみてもますます遠く、かけ離れるばかりである。また經典を開くことの意味は人による修行の違いを学ぶことであり、すぐに悟る人もいればゆつくり悟る人もいるということ、はつきりと知ることであつて、教えの如くしつかりと修行すれば必ず悟りが得られるのである。それをいたづらにあれこれと頭で推し量つて真理を得る功德であるなどと邪推してはならない。愚かにも一千万回も念仏を

らぬなり。おろかに千万誦の口業をしきりにして仏道にいたらむとするは、なほこれながえをきたにして、越にむかはんとおもはんがごとし。又、円孔に方木をいれんとせんとおなじ。文をみながら修するみちにくらき、それ医方をみる人の合薬をわすれん、なにの益かあらん。口声をひまなくせる、春の田のかへるの、昼夜になくがごとし、つひに又益なし。いはむやふかく名利にまどはさるるやから、これらのことをすてがたし。それ利食のころはなはだふかきゆゑに。むかしすでにありき、いまのよになからむや、もともあはれむべし。

ただまさにしるべし、七仏の妙法は、得道明心の宗匠に、契心証会の学人あひひしたがうて正伝すれば、的旨あらはれて稟持せらるるなり。文字習学の法師のしりおよ

唱えてそれが仏道の実践だと思ふのは、車を北に向けて南の国に向かおうとするようなものである。また丸い穴に四角い木を入れようとすると同じである。お経を読みながら修行する方法が分からない、それは医術書を読みながら薬の調合を忘れてしまうようなものである、それで何の役にたつのだろう。絶えず声を出して念仏を唱えるのは、春の田の蛙が昼夜分かつたず鳴くようなものである。結局役にたたない。まして自分の名声などに惑わされている人々はこれらのことを棄てられない。それは利益を貪る心をはなはだ強いからである。そういう人は昔からいたが、今の世にいないといふことはありえないだろう、最も哀れむべき人々である。

ただここはよく知っておかなければならない。お釈迦様へと法を継いできた過去七代に亘る仏様への崇高な教えは、真実を明らかにした正しい指導者が真剣に実践する修行僧にしっかりと契りを交わし伝授すれば、その趣旨が明らかとなり、間違ひなく引き継がれるのである。これは文字のみに頼っている学僧の知り及ぶところではない。そうであるが故に、直

ぶべきにあらず。しかあればすなはち、この疑迷をやめて、正師のをしへにより、坐禅辨道して諸仏自受用三昧を証得すべし。

とうていはく、いまわが朝につたはれるところの法華宗、華嚴經、ともに大乘の究竟なり。いはむや真言宗のごときは、毘盧遮那如来したしく金剛薩埵につたへて師資みだりならず。その談ずるむね、即心是仏、是心作仏というて、多劫の修行をふることなく、一座に五仏の正覚をとなく、仏法の極妙といふべし。しかあるに、いまいふところの修行、なにのすぐれたることあれば、かれらをさしおきて、ひとへにこれをすすむるや。

しめしていはく、しるべし、仏家には教の殊劣を対論することなく法の淺深をえ

ちに疑念を捨て、正師の教えに従つて坐禅修行し、自受用三昧（真理に浸つてその美味を享受する心地）を自身で修得しなさい。

【第四問】質問する、今日本に伝わるところの法華宗（天台宗）、華嚴經（奈良東大寺を本山とする宗派）、ともに大乘仏教の優れた教えである。ましてや真言宗などは大日如来がその弟子の二祖金剛薩埵に伝えて、師から弟子へ法を正しく受け継いでいる。その説くところは即心是仏、是心作仏と言って、とてつもない年月の修業を経ることなく、一度に五仏（大日如来、阿闍仏、宝生如来、弥陀如来、不空成就仏）の悟りが得られると主張している、仏法の極みとも言うべきであろう。にもかかわらず、今ここで言う坐禅修行には何の優れたものがあるか、それらを差し置いて勧めるのであるか。

答えて言う、仏教徒は教えの優劣を論ずることなく、法の深いか浅いかを問題にすることなく、ただ本当の修行かどうかを知るべきである。靈雲禪師が桃の花を見て悟ったとか、

らばず、ただし修行の真偽をしるべし。
草花山水にひかれて仏道に流入すること
ありき、土石沙磧をにぎりて仏印を裏持
することあり。いはむや広大の文字は万象
にあまりてなほゆたかななり、転大法輪又一
塵にをさまれり。しかあればすなはち、即
心即仏のことば、なほこれ水中の月なり、
即坐成仏のむね、さらに又かがみのうち
のかけなり。ことばのたくみにかかはるべ
からず。いま直証菩提の修行をすすむる
に、仏祖単伝の妙道をしめして、真実の
道人とならしめんとなり。

又、仏法を伝授することは、かならず証
契の人をその宗師とすべし。文字をかぞふ
る学者をもてその導師とするにたらず。一
盲の衆盲をひかんがごとし。いまこの仏祖
正伝の門下には、みな得道証契の哲匠を

香嚴禪師^{一〇}が竹の音を聞いて悟りを得たなど草花山水等の
縁によつて仏道に入つてきた先人がいたし、また法華經^二に
よれば土を積んで仏廟としたり、砂を集めて仏塔を作つて仏
法の教えを受持したという教えもあつた。ましてや自然には
真実の文字が溢れんばかりに記されていて尽きることがない。
どのような壮大なる説法もただ一つの塵のなかに欠けること
なく収まつている。要するに、「即心即仏」という言葉は水中
に映る月であり、また「即坐成仏」の意味もまた鏡の中に映
る影であつてそれらは虚像にしかすぎないのである。言葉の
巧みに騙されてはいけない。今修行がそのまま悟りである
という修行を勧めるのは、初祖より正当に相承された崇高な
る坐禪と言う方法を示して、真実の仏法者とならしめるため
である。

又仏法を伝授するには必ず正当に嗣法された人を師とすべ
きである。文字に頼る学者を以て仏道の師とするのはよくな
い。一人の盲人が多くの盲人を引き連れて歩くようなもので
ある。今、この正当に相承されてきた仏道の門下で修行者た

うやまひて、仏法を住持せしむ。かるがゆゑに、眞陽の神道もきたりし帰依し、証果の羅漢もきたり問法するに、おのおの心地を開明する手をさづけずといふことなし。余門にいまだきかざるどころなり。ただ、仏弟子は仏法をならぶべし。又しるべし、われらはもとより無上菩提かけたるにあらず、とこしなへに受用すといへども、承当することをえざるゆゑに、みだりに知見をおこす事をならひとして、これを物とおふによりて、大道いたづらに蹉過す。この知見によりて、空花まちまちなり。あるいは十二輪転、二十五有の境界とおもひ、三乘五乘、有仏無仏の見、つくる事なし。この知見をならうて、仏法修行の正道とおもふべからず。

しかあるを、いまはまさしく仏印により

ちは、道を得て正当に受け継がれた師匠を敬つて、仏法をしつかりと守っている。それ故にあらゆる世界の神々がやつて来て帰依し、また悟りを開いた阿羅漢もやつて来て法を尋ねるのである。その時それぞれが本来の自己を開明する手助けを受けないということはない。こういうことは他の宗門では行つてはいない。仏弟子はひたすら仏法を習うべきである。

又、我々は本来、仏の悟りが欠けていることはなく、常にそれを享受しているのであるが、しかしそれをしつかりと自己の眞実として捉えていないので、誤つて分別心を起して、悟りを対象として捉え追いかけてしまい、結局自己の眞実を見出す道を間違つてしまうのである。このような分別心によつて有りもしない花が空に浮かんでいるように見えてしまう。十二の因縁三による輪廻転生、欲界色界無色界にある二十五の世界三、声聞乘、縁覚乘、菩薩乘、人天乘、仏乘、あるいは仏があるとかないとか、などに悩んで尽きることがない。こういつた分別を学んで仏法修行の正しい道と思つてはならない。

て万事を放下し、一向に坐禅するとき、迷悟情量のほとりをこえて、凡聖のみちにかかはらず、すみやかに格外に逍遙し、大菩提を受用するなり。かの文字の筌罫にかかはるものの、かたをならぶるにおよばむや。

とうていはく、三学のなかに定学あり、六度のなかに禅度あり。ともにこれ一切の菩薩の、初心よりまなぶところ、利鈍をわかず修行す。いまの坐禅も、そのひとつなるべし、なによりてか、このなかに如来の正法あつめたりといふや。

しめしていはく、いまこの如来一大事の正法眼蔵、無上の大法を、禅宗となづくるゆゑに、この問きたれり。

しるべし、この禅宗の号は、神丹以東におこれり、竺乾にはきかず。はじめ達磨大

そうであるから、今はまさしく悟りの核心によつて、全てを投げ捨て、ひたすら坐禅する時、迷悟の分別を乗り越え、凡夫か聖人かに関わらず、直ちに捉われの世界から飛び出し、無上の真実を享受するのである。文字をいじくり回す学者連中が肩を並べることなど出来ようはずがない。

【第五問】質問する、戒・定・慧の三学のなかに定学（禅定）がある、又布施、持戒、忍辱、精進、智慧、禅定の六波羅密のなかに禅定波羅密がある。ともに一切の仏道修行者が志しを持って最初に学ぶものであり、優れているか劣っているかに関わらず修行するものである。今の坐禅もその一つに違いない、それではこの坐禅が如来の正しい仏法を集めたものであると云うのはどのような理由からか。

答えて云う。いま衆生救済のこの上ない大いなる教えを禅宗と名付けるが故に此の問いが発せられたのであろう。

この禅宗という号は中国より東の国で名付けられたものであって、インドでは聞かない。初め達磨大師が中国の嵩山と

師、嵩山そうざんの少林寺にして九年面壁のあひだ、
道俗どうぞくいまだ仏正法をしらず、坐禪を宗とす
る婆羅門となづけき。のち代代だいだいの諸祖、み
なつねに坐禪ざぜんをもはらず。これをみるおろ
かなる俗家ぞくけは、実をしらず、ひたたけて坐
禪宗といひき。いまのよには、坐ざのことば
を簡かんして、ただ禪宗といふなり。そのこ
ろ、諸祖の広語こうごにあきらかなり。六度およ
び三学の禪定ぜんじやうにならべていふべきにあら
ず。

この仏法の相伝の嫡意ちやくいなること、一代
にかくれなし。如来、むかし靈山りやうぜんえじやう会上に
して、正法眼藏涅槃妙心、無上の大法だいはうを
もて、ひとり迦葉尊者かじやうにのみ付法せし儀式
は、現在して上界じやうかいにある天衆、まのあた
りにみしもの存ぞんぜり、うたがふべきにたら
ず。おほよそ仏法は、かの天衆てんしゆ、とこし

いう山にある少林寺というお寺で九年の間、面壁の坐禪をし
ていたが、出家者も在家者もその時は仏の正しい教えとい
もの知らずに、坐禪を宗旨とするバラモンと名付けた。そ
の後、代々の祖師方は専ら坐禪をしていたので、これを見て
いた愚かな在俗の者達はその真実を知らずに、ただ混同して
坐禪宗と呼んでいたのである。今の世では言葉を略してただ
禪宗と言っている。その意味は祖師方の語録に明らかである。
六波羅蜜ないし戒・定・慧の禪定に並べて言うような類のも
のではない。

この仏法が師から弟子へ正しく相承されていることは疑い
の余地がない。お釈迦様が昔、靈鷲山の山上で正法眼藏涅槃
妙心という仏法のこの上ない教えを弟子の迦葉尊者一人に伝
授したことがあった。天上界にいる神々たちの一日は私たち
の四、五百年に相当するので、この儀式を目の当たりにして
今なお生きておられる神々も多いであろう、疑いの余地はな
い。全ての仏法をか天衆は常に護持している。そのハタラ
キはずっと続いており、未だ古くなるということはない。

なへに護持するものなり、その功いまだふりず。

まさにしるべし、これは仏法の全道なり、ならべていふべき物なし。

とうていはく、仏家なによりてか、四儀のなかに、ただし坐にのみおほせて禅定をすすめて証入をいふや。

しめしていはく、むかしよりの諸仏、あひつぎて修行し、証入せるみち、きはめしりがたし。ゆゑをたづねば、ただ仏家のもちあるところをゆゑとするべし。このほかにたづぬべからず。ただし、祖師ほめていはく、坐禅はすなはち安樂の法門なり。はかりしりぬ、四儀のなかに安樂なるゆゑか。いはむや、一仏二仏の修行のみちにあらず、諸仏諸祖にみなこのみちあり。

この点をよく心得るべきである、これは仏法の全体であつて並べて比べる物などないのである。

【第六問答】質問する。仏教徒は生活の全てである行住坐臥四の四つの威儀のなかで坐禅のみに任せて禅定をすすめて悟りの入り口とするのであろうか。

答えて云う、昔からおわします仏たちが次々に修行しそれぞれ悟りを得た方法を調べ尽くすことは難しい。しかし悟りを得ることが出来た理由を訊いてみれば、仏教徒が普段行っていることをしていただけで、それ以外のことを聞いても意味がない。一方で祖師は称賛して云う、坐禅は要するに安樂の法門であると。考えてみれば、四つの威（行住坐臥）の中で安樂であるが故であらうか。言うまでもなくそれは一人や二人だけの祖師が修行した（方法）ではない、それは過去の仏祖の皆が行つてきた道（方法）なのである。

とうていはく、この坐禪の行は、いまだ仏法を証合せぎらんものは、坐禪辨道してその証をとるべし。すでに仏正法をあきらめえん人は、坐禪なにのまつところあらむ。

しめしていはく、癡人のまへにゆめをとらず、山子の手には舟棹をあたへがたしといへども、さらに訓をたるべし。

それ、修証は一つにあらずとおもへる、すなはち外道の見なり。仏法には修証これ一等なり。いまも証上の修なるゆゑに、心の辨道すなはち本証の全体なり。かるがゆゑに、修行の用心をさつくるにも、修のほかに証をまつおもひなかれとをしふ、直指の本証なるがゆゑなるべし。すでに修の証なれば、証にきはなく、証の修なれば、修にはじめなし。ここをもて釈迦如来、

【第七問】 質問する、この坐禪の修行は未だ仏法を会得していない者には坐禪の修行をして悟りを得るべきであると云える。しかしすでに仏法の正しい教えを明らかにし、はつきりと身に付けた人にとつては坐禪してさらに何を得るものがあるうか。

答えて云う、痴れ者に夢を説明して本気にされても困るし、山男に舟の棹を与えても使い方すら知らないだろう、とは思ふもののもう少し教えてみようか。

このように修行と悟りとが一つではないと思つてしまう考え方は仏教徒以外のものの方である。仏法においてはあくまで修行と悟りは一つである。今この坐禪も悟りの上の修行であるから、初心者が行う修行も悟りの全体そのものである。故に修行中の注意として、悟りを得ようとして修行するなど教えるのは、坐禪自体が本来備えている悟りを指し示しているからである。修行がお悟りそれ自体であるから、悟りに限界はなく、悟りの上の修行であるから修行に始まりはない。この点において釈迦牟尼如来、摩訶迦葉尊者ともに悟りを得

迦葉尊者、ともに証上の修に受用せられ、
達磨大師、大鑑高祖、おなじく証上の修に
引転せらる。仏法住持のあと、みなかくの
ごとし。

すでに証をはなれぬ修あり、われらさ
いはひに一分の妙修を単伝せる、初心の
辨道すなはち一分の本証を無為の地にう
るなり。しるべし、修をはなれぬ証を染汚
せざらしめんがために、仏祖しきりに修行
のゆるくすべからざるとをしふ。妙修を
放下すれば本証手の中のみてり、本証を出
身すれば、妙修通身におこなはる。

又、まのあたり大宋国にしてみしかば、
諸方の禪院みな坐禪堂をかまへて、五百六
百および一二千僧を安じて、日夜に坐禪を
すすめき。その席主とせる伝仏心印の宗師
に、仏法の大意をとぶらひしかば、修証の

てさらに修行を積まれ、達磨大師、大鑑慧能禪師も同じよう
に悟りの上の修行に引き寄せられて坐禪をしたのである。こ
れらは仏法が一代一代しつかりと受け継がれてきた足跡なの
である。

悟りと一つになっている修行が既にある、我々は幸いにも
崇高なる修行を正しく相続しているので、初心者初めての
修行がすなわちその人の悟りとなって、まっさらな心に植え
つけられるのである。修行と一体である悟りが世俗の垢にま
みれないようにするために仏祖は頻りに修行を緩めてはなら
ないと教えて来た。このような崇高なる修行を一旦手放して
みると悟りが手の中に満ちていることが分かる、悟りから一
歩出てみると体中が修行していることも分るのである。

又私が訪ねた中国で目の当りにしたのは、諸方の禪院にみ
な坐禪堂があり、五、六百人、あるいは千、二千人の僧を安
居させ日夜坐禪を勧めていたのである。その寺の主であり仏
法の核心を伝えている指導者に仏法で最も大切な趣旨を尋ね
たところ、修行があつて悟りがあるではなく修行がそのまま

兩段にあらぬむねをきこえき。

このゆゑに、門下の参学のみならず、
求法の高流、仏法のなかに真実をねがは
む人、初心後心をえらばず、凡人聖人を
論ぜず、仏祖のをしへにより、宗匠の道を
おうて、坐禅辨道すべしとすむ。

きかずや、祖師のいはく、修証はすな
はちなきにあらず、染汚することはえじ。
又いはく、道を見るもの、道を修すと。し
るべし、得道のなかに修行すべしといふこ
とを。

とうていはく、わが朝の先代に、教を
ひろめし諸師、ともにこれ入唐伝法せしと
き、なんぞこのむねをさしおきて、ただ教
をのみつたへし。

しめしていはく、むかしの人師、この法

悟りであるという教えを頂いた。

この故に、わが門下で参学修行するものばかりでなく、法
を求める優れた人、仏法のなかに真実を求めようとする人は、
初心の人、古くから学んでいる人かを問わず、普通の人か悟
れる人かを区別せず、ただ仏の教えに従つて、宗旨に秀でた
指導者を見習つて坐禅修行すべきであると勧めるのである。

昔、ある老師が言つていた、即ち「修行と悟りはないこと
はない、しかしそれに捉われて世俗の塵にまみれるようなこ
とがあつてはならない」と。また「坐禅(の道)を見る者が真
実(の道)を修行できる」と。知るべきことは、真実の道を得
ようとするのが即ち坐禅の修行をすることなのである。

【第八問】質問する。わが日本で先の時代、經典を広めた
先達が相次いで中国を訪れ法を伝えようとした時、この坐禅
を差し置いて、何故ただ經典のみを伝えたのであろうか。

答えて云う、先達がこの坐禅を伝えなかつたのは、

をつたへざりしことは、時節のいまだいたらずざりしゆゑなり。

とうていはく、かの上代の師、この法を
会得せりや。

しめしていはく、会せば通じてむ。

とうていはく、あるがいはく、生死しじょうをな
げくことなかれ、生死を出離しゆつりするにいとす
みやかなるみちあり。いはゆる心性しんじょうの
常住じやうじゆうなることわりをしるなり。そのむね
たらく、この身体しんたいは、すでに生あればかな
らず滅めつにうつされゆくことありとも、この
心性しんじょうはあへて滅する事なし。よく生滅に
うつされぬ心性しんじょうわが身みにあることをしり
ぬれば、これを本来しんらいの性しやうとするがゆゑに、
身みはこれかりのすがたなり、死し此生しじょう彼ひさ

その時点では未だ期が熟しておらず、世間がそれを求めてい
なかつたからである。

【第九問】質問する。それらの先達はこの坐禪の法を理解
していたのであろうか。

答えて云う、理解していたら坐禪に通じていたであらう。

【第十問】質問する。ある人が云う、「人は必ず死ぬとい
うが、生死を嘆く必要はない、生死の悲しみから逃れるのにい
い方法がある、所謂、心の本体の永遠不滅を知ることである」
と。その意味するところは、この身体が生まれて後、必ず滅
することになるとしても、この心の本体が滅することはない
ということである。生滅から脱した我が心の本体がこの身に
あることを知ったならば、この心の本体こそが本来の正体で
ありこの身体は仮の姿でしかない。ここで死んで、あちらで
生まれる、定まる所はない。しかし心はこれ常住不滅である、
過去現在未来に亘つて変わることはない。このように知るこ

だまりなし。心はこれ常住なり、去来こらい現在
かはるべからず。かくのごとく知るを、
生死しよじをはなれたりとはいふなり。このむね
をしるものは、従来じゆらいの生死ながくたえて、
この身を終はるとき性海しよかいにいる。性海に
朝宗ちゆうそうするとき、諸仏如来のごとく妙徳みょうとくま
さに備そなはる。いまはたとひしるといへど
も、前世ぜんぜいの妄業むじやうになされたる身体しんたいなるがゆ
ゑに、諸聖しよせいとひとしからず。いまだこの
むねをしらざるものは、ひさしく生死しよじにめ
ぐるべし。しかあれば甲すなはち、ただいそ
ぎて心性しんじやうの常住なるむねを了知りやうちすべし。
いたづらに閑坐かんざして一生をすぐさん、なに
のまつところかあらむ。かくのごとくいふ
むね、これはまことに諸仏諸祖の道どうにかな
くりや、いかむ。

しめしていはく、いまいふところの見けん

とを、生死の苦しみから離れると云うのである。此の事を了
解しているものは従来じゆらいの生れては死ぬという生死が永遠えいゑんに去
つて、この身が終おひわる時、深く広い真理の海に入るのである。
真理の海に流れ込む時、既に悟りを得た諸仏如来のように崇
高なる徳が具あわるのである。今、例えそのことを知っていた
としても、前世ぜんぜいに為した悪業の報うを受けている身体である
が故に、既に悟りを得た聖人達と同じになるといふわけでは
ない。未だにこのことを知らないものは、生れては死ぬ生死
輪廻りんじゆをこの先も巡めぐつていくことであろう。そうであるとすれ
ばすみやかに、そして急いで心の本体の常住不滅なることを
理解すべきである。いたづらにのんびりと坐り一生を過すごし
て、いったい何を待まちとうとしてるのであるか、と。この
ように言う趣旨は本當に諸仏諸祖の言ことにあつてにあつて
いるであろうか、如何か。

答えて云う、今いまここで言ことっていることは全く仏法ではない。

またく仏法にあらず。先尼外道が見なり。

いはく、かの外道の見は、わが身、うち
にひとつの靈知あり、かの知、すなはち縁
にあふどころに、よく好悪をわきまへ、是
非をわきまふ。痛痒をしり、苦樂をしる、
みなかの靈知のちからなり。しかあるに、
かの靈性は、この身の滅するとき、もぬ
けてかしこにむまるるゆゑに、ここに滅す
とみゆれども、かしこの生あれば、なが
く滅せずして常住なりといふなり。かの
外道が見、かくのごとし。

しかあるを、この見をならうて仏法とせ
む、瓦礫をにぎつて金宝とおもはんよりも
なほおろかなり。癡迷のはづべき、たとふ
るにもなし。大唐国の慧忠国師、ふか
くいましめたり。いま心常相滅の邪見を
計して、諸仏の妙法にひとしめ、生死の

それは仏教徒ではないものの見解である。

その異教徒の見解では自分の身の内に一つの靈魂がある、
とする。それはすなわちその靈魂が縁によつて出会いがある
時、好き嫌いの感情を起し、良いことか悪いことかをわき
まえる。痛い、痒いを知り、苦しい、楽しいという心地を知
つている、それは全て靈魂の力であるとする。ところが、そ
の靈魂はこの身体が滅する時には、身体から脱け出て、あち
らの世界に生れ変わるが故に、この身体においては滅すると
見えるけれども、あちらの世界で生をうけることになるので、
長く滅していることはなく、従つて常住であり永遠であると
云う。これがその異教徒のものの見方なのである。

その様な見方に対して、それを習つて仏法とするのは瓦礫
を握つて黄金の宝だと思ふよりもさらに愚かである。たわけ
た迷いごとで恥ずべきことは例えようもない。大唐国(中国)
の慧忠国師^{二五}が深く戒めている。今、心(靈魂)は不滅で、姿
形のみが滅するという誤つた考えをはたらかせて、諸仏の妙
法に等しいものとし、生死の原因を作り上げながら、生死を

本因ほんいんをおこして、生死せいじをはなれたりとおもはむ、おろかなるおろかにあらずや。もともあはれむべし。ただこれ外道げどうの邪見じやけんなりとしれ、みみにふるべからず。

ことやむことをえず、いまなほあはれみをたれて、なんぢが邪見じやけんをすくはば、しるべし、仏法にはもとより身心しんじん一如いちにちよにして、性相不二じやうさうふじなりと談ずる、西天東地さいてんとうちおなじくしれるところ、あへてたがふべからず。いはむや常住じやうじゆうを談ずる門には万法ばんぽうみな常住じやうじゆうなり、身と心とをわくことなし。寂滅じやくめつを談ずる門には諸法しよぽうみな寂滅じやくめつなり。性と相とをわくことなし。しかあるを、なんぞ身滅心常しんめつしんじやうといはむ、正理しやうりにそむかざらむや。しかのみならず、生死せいじはすなはち涅槃ねはんなりと覺了かくりやうすべし。いまだ生死せいじのほかに涅槃ねはんを談ずることなし。いはむや、心は

解脱げつだつしたと思う、これを愚かと言わずして何と言おう。最も哀れむべきである。これは異教徒の誤った見方であり、聞くべきではない。

ここまで来て話を止める訳にもいかないので、今はさらに哀れみをもって、おまえさんの誤った考えを正すことにしよう。仏法では初めから身と心とは一つであつて、本体と現れは別物ではないと教えているのである、それはインドでも中国でも同じく知られていることであり、それを別物と考えてはいけない。まして常住不滅を説く場合では全てが常住不滅であると教え、身と心を分けることではない。消えてなくなる寂滅を教えとする場合は全てが寂滅である。本体と現れを分けることはない。であるのに、何故、身は滅ぶが心は不滅であるなどと言えるのか、正しい道理に背くことにならないと云えるのか。それだけではない、生死はすなわち涅槃であると理解すべきなのである。仏法では生死の他に涅槃を語ることはない。

身をはなれて常住なりと領解するをもて、生死をはなれたる仏智に妄計すといふとも、この領解智の心は、すなはちなほ生滅して、またく常住ならず。これはかなきにあらずや。嘗観すべし、身心一如のむねは、仏法のつねの談ずるところなり。しかあるに、なんぞ、この身の生滅せんとき、心ひとり身をはなれて、生滅せざらむ。もし、一如なるときあり、一如ならぬときあらば、仏説おのづから虚妄にありぬべし。又、生死はのぞくべき法ぞとおもへるは、仏法をいとぶつみとなる。つつしまざらむや。

しるべし、仏法に心性大総相の法門といふは、一大法界をこめて、性相をわかず、生滅をいふことなし。菩提涅槃におよぶまで、心性にあらざるなし。一切諸法、

まして心は身を離れて常住不滅であると理解し信ずることを以て生死を離れたものとし、それが仏の智慧であると妄信したとしても、このように理解した心もなお生滅を繰り返して、まったく留まらない。これは全く浅はかな考えである。よく考えてみよう。身と心が一つであるということは仏法の基本の教えである。であるのに何故、この身が生滅を繰り返す時、心だけ独り身を離れて、生滅しないことがある。もし身と心が一つである時があり、また一つでない時があるとするならば、仏の教えに元々誤りがあったことになる。また生死は排除すべきものだとするならば、それは仏法を嫌う罪となつてしまう。慎むべきである。

仏法(大乘起信論)に云う「心性大総相の教え」と云うのは、この世のあらゆる世界において、ものの本質とものの現れとが分かれていることはなく、生と滅を分けて云うこともない。菩提涅槃に至るまで心の本性でないものはない。全ての真理、

万象森羅ともに、ただこれ一心にして、こめずかねざることなし。このもろもろの法門、みな平等一心なり。あへて異違なしと談ずる、これすなはち仏家の心性をしれる様子なり。

しかあるをこの一法に身と心とを分別し、生死と涅槃とをわくことあらむや。すでに仏子なり、外道の見をかたる狂人のしたのひびきを、みみにふるることなかれ。

とうていはく、この坐禅をもはらせむ人、かならず戒律を厳淨すべしや。

しめしていはく、持戒梵行は、すなはち禅門の規矩なり、仏祖の家風なり。いまだ戒をうけず、又戒をやぶれるもの、その分なきにあらず。

この世の大自然は、共にただ一つの心の現れであつて、その心に含まれない、あるいは心と一つになつていないものはない。このそれぞれの教えはみな平等であり一つの心である。全く異なっているところはない。この様に説くのが、仏教徒の心の正体を知っている有り様なのである。

そうであるのに、この一つの真理において身と心が別のものであると分けて考えて、生死と涅槃とを区別することなどがあるうか。我々は既に仏弟子である。異教徒の教えを説いている狂人の云うことを聞いてはならない。

【第十一問】質問する、この坐禅を専らする人は必ず戒律を守らなければならないのであろうか。

答えて云う、戒を守り修行することはすなわち禅宗の規則である、仏祖の家風である。いまだ戒を受けていないもの、又戒を破つた者といえども、坐禅をする資格がないわけではない。

とうていはく、この坐禪をつとめん人、
さらに真言止觀の行をかね修せん、さまざま
げあるべからずや。

しめしていはく、在唐のとき、宗師に
真訣をききしちなみに、西天東地の古今に、
仏印を正伝せし諸祖、いづれもいまだしか
のごときの行をかね修すときかずといひ
き。まことに、一事をこととせざれば一智
に達することなし。

とうていはく、この行は在俗の男女も
つとむべしや、ひとり出家人のみ修するか。
しめしていはく、祖師のいはく、仏法を
会すること、男女貴賤をえらぶべからずと
きこゆ。

とうていはく、出家人は、諸縁すみやか

【第十二問】質問する、この坐禪修行する人がさらに真言
密教の行や天台の摩訶止觀を同時に修行するのは妨げになる
であろうか。

答えて云う、私が中国にいた時、指導者に真の奥義を聞い
た折に、インド中国の過去から今に至るまで真の仏法を正し
く伝えて来た先達のいずれもいまだその様な修行を同時にし
たことはないと言っていた。まことに一つのことをしっかりと
と行じないと、一つの智慧に達することは出来ないというこ
とであろう。

【第十三問】質問する、この修行は、在俗の男女も勤める
べきであろうか、ただ出家人のみが修行すべきなのか。

答えて云う、先達が云うには、仏法を自分のものとするこ
とには男女、貴賤の区別はない、と。

【第十四問】出家した修行者は日常生活の関わりから離れ

にはなれて、坐禪弁道にさはりなし。在俗ざいよくの繁務はんむは、いかにしてか一向に修行して無為むゐの仏道にかなはむ。

しめしてはいはく、おほよそ、仏祖ぶつそあはれみのあまり、広大の慈門じもんをひらきおけり。これ一切衆生を証入しやうにやうせしめんがためなり、人天にんてんたれかいらざらむものや。ここをもて、むかしいまをたづぬるに、その証しやうこれおほし。しばらく、代宗だいそう・順宗じゆんそうの帝位にして、万機ばんきいとしげかりし、坐禪弁道して仏祖の大道を会通えすうす。李相国りしやうこく、防相国ぼうしやうこく、ともに輔佐ふさの臣位にはむべりて、一天の股肱ここうたりし、坐禪弁道して仏祖の大道だいたうに証入す。ただこれころ志ざしのありなしによるべし、身の在家出家にかかはらじ。又ふかくことの殊劣しゆれつをわきまふる人、おのづから信ずることあり。いはむや世務せむは仏法

られるので、坐禪弁道には支障ないだろう、しかし在俗のものはいろいろと日常の勤めがあり、どうやってひたすら修行し生滅を離れた仏道に適うことができるのであろうか。

答えて云う、仏様は人々を慈しんで、広大なる慈悲の門を開いておいてくださった。これは全ての人々を悟りの道に入れようとしたためである。人間界、天上界でそこに入れないものがあるか。この点について古今の例を訪ねてみると、その証は少なくない。少し例を挙げてみよう、中国、唐朝の第八代の帝である代宗や第十代の順宗は帝の位にあつて天下のまつりごとの為に極めて忙しかったが、坐禪弁道して仏様の教えを会得した。李相国、防相国、ともに天子を輔佐する大臣職にあつて、天子の手足となつて働いていたが、坐禪弁道してやはり仏様の教えを体得した。ただこれらは志があるかないかによるもので、自分が在家であるか出家であるかに関わるものではない。また深く物事の優劣を判断出来る人は自然と仏道を信じていることができる、ましてや世俗の雑事が仏法にとって障害であると思つている人は、ただ世俗には仏

をさふとおもへるものは、ただ世中に仏法なしとのみしりて、仏中に世法なき事をいまだしらざるなり。

ちかごろ大宋に馮相公といふありき。祖道に長ぜりし大官なり。のちに詩をつくりてみづからをいふに、いはく、

公事之余喜坐禪、

少曾將脇到牀眠。

雖然現出宰宦相、

長老之名四海傳。

(公事の余に坐禪を喜む、曾て脇を將て牀に到して眠ること少し。然く宰宦相と現出せりと雖も、長老の名、四海に伝はる。)

これは、宦務にひまなかりし身なれども、仏道にこころざしふかければ、得道せるなり。他をもてわれをかへりみ、むかしをも

法を活かせる時間と場所がないということを憂うるばかりで、仏法においては世俗の如何を問うことがないということを知らないだけなのである。

近頃、中国の大宋に馮相公という人がいた。仏道をよく心得た官吏であった。後に詩を作つて自分のことを次のように云つた。

「公務之余暇に坐禪を好みよく坐る、

今まで横になり床に寝ることなどなし。

大臣として世に知られたけれども、

禪の長老という名が国内外に轟きわたつた。」

これは公務に忙しくて暇を持ってない身であつたが、仏道の志が深ければ、道を得ることが出来るということを現わしている。他人を見て自分を省みること、又昔を以て今を

ていまをかがみるべし。

鑑みるべきである。

大宋国には、いまのよの国王大臣、士俗男女、ともに心を祖道にとどめずといふことなし。武門文家、いづれも参禅学道をごころぎせり。ごころぎすもの、かならず心地を開明することおほし。これ世務の仏法をさまたげざる、おのづからしられたり。

大宋国(中国)には今の世の国王、大臣、官吏、一般人、男女ともに心に仏道を留めていない人はいない。武家も文家もいづれも参禅学道を志している。参禅を志す者は真実の自己を見出すことが多い。これで世俗の雑務が仏法を妨げることがないということがお分かりになるう。

国家に真実の仏法弘通すれば、諸仏諸天ひまなく衛護するがゆゑに、王化太平なり。聖化太平なれば、仏法そのちからをうるものなり。

国家に真実の仏法が広まれば、諸仏諸天の加護が常にあるから、王の徳により治世は太平である。また帝の徳により治世が太平であれば仏法はその力を得るのである。

又、釋尊の在世には、逆人邪見みちをえき。祖師の会下には、獵者樵翁さとりをひらく。いはむやそのほかの人をや。ただ正師の教道をたづぬべし。

又、お釈迦様の在世には、大罪を犯した者も誤った宗教の持ち主も道を得たのである。祖師の門下にあつては狩人^{二六}や樵^{二七}も悟りを開いた。ましてそのほかの人が悟りを開けないことがあるうか。但し正しい指導者の教えを乞うべきである。

とうていはく、この行は、いま末代悪世

【第十五問】質問する、この坐禅修行は今この末代悪世に

にも、修行せば証をうべしや。

しめしてはいはく、**教家**に**名相**をこととせるに、なほ**大乘実教**には、**正像末法**をわくことなし。修すればみな**得道**すといふ。いはむやこの**単伝の正法**には、**入法出身**、おなじく**自家の財珍**を受用するなり。証の得否は、**修せむもの**、おのづからしらむこと、**用水の人の冷煖**をみづからわきまふるがごとし。

とうていはく、あるがいはく、**仏法**には、**即心是仏**のむねを了達しぬるがごときは、**くちに経典を誦せず**、**身に仏道を行ぜざれども**、あへて**仏法**にかけたるところなし。ただ**仏法**はもとより**自己**にありとし、これを**得道の全円**とす。このほかさらに他人にむかひてもとむべきにあらず。いはむや

あつても、修行すれば悟りが得られるであろうか。

答えて云う、**天台宗**などの**経典の教え**に拠る**宗旨**では**法門**の**名目**や**様相**を**大事**にしているが、それでも**大乘の教え**として**正法**、**像法**、**末法**を区別することはない。修行すればみな道を得られると云っている。ましてやこの**筋目正しい教え**に於いては初めて**発心**した時も、**解脱**を得た後も同じように**自身に備わっている能力**を享受しているのである。悟りを得られたかどうかは修行するものが自ら知れることであり、水を使つてみて**温かい**か**冷たい**かは**自ずと分かる**のと同じである。

【第十六問】質問する、ある人が云う、「**仏法**には**即心是仏**の極意を完全に理解した時には**経典**を唱えることなく、又**身体**で**仏道**を修行しなくても、あえて**仏の教え**に欠けているところは**ない**。ただ**仏の教え**は**初めから自己に備わっている**と知ること、これが**仏道**を究めるための**全て**である、このほかさらに**他人**に向かつて**求めるべきもの**などない、ましてや**坐禅**や**弁道**など**面倒な**ことをする必要などあるものか。」

坐禪弁道をわづらはしくせむや。

しめしてはいはく、このことば、もともはかなし。もしなんぢがいふごとくならば、このころあらむもの、たれかこのむねををしへむに、しることなからむ。

しるべし、仏法はまさに自他の見をやめて学するなり。もし、自己即仏とするをもて得道とせば、釋尊むかし化道にわづらはじ。しばらく古徳の妙則をもて、これを証すべし。

むかし、則公監院といふ僧、法眼禪師の会中えいちゆうにありしに、法眼禪師とうていはく、則監寺そくかんす、なんぢわが会にありていくばくのとぎぞ。

則公がいはく、われ師の会にはむべりて、すでに三年をへたり。

禪師のいはく、なんぢはこれ後生なり、

答えて云う、この言葉は最もたわいのないものである。もしおまえさんの云うようなことであれば、分別のある人にこの言葉の趣旨を教えて、理解できないことなどあるうか。

仏法はまさに自分と他人との区別を止める修行をすることであるということ知らねばならない。もし区別をしたまま自己がそのまま仏になると知って仏道を究めることだとするなら、お釈迦様が当時人々を導くのに苦勞はしなかつたであろう、ここでいにしえの徳の高い禪師の手本を参照して実証としてみよう。

昔、則公監院一九と云う僧が、法眼文益禪師の門下にいたにある時、禪師が尋ねた、「則監寺よ、おまえは私の門下に入つてどのくらいになるかのう」。

則公が云つた、「私は禪師の門下に入つて既に三年になりま

す。」
禪師が云う、「おまえさんはわしの後輩だろう、なぜ

なんぞつねにわれに仏法をとほさる。

則公がいはく、それがし和尚をあざむくべからず。かつて青峰せいほうの禪師ぜんしのところにありしとき、仏法ぶつぽうにおきて安楽あんらくのところを了達りやうたつせり。

禪師のいはく、なんぢいかなることばによりてか、いることをえし。

則公がいはく、それがしかつて青峰せいほうにとひき、いかなるかこれ学人がくにんの自己じこなる。青峰のいはく、丙ひょう丁てい童子どうじ来求らいきゅう火か。

法眼ほうげんのいはく、よきことばなり。ただしおそらくはなんぢなんぢ会えせざらむことを。

則公がいはく、丙丁ひょうていは火ひに属ぞくす。火をもてさらに火をもとむ、自己じこをもて自己をもとむるにたりと会えせり。

禪師のいはく、まことにしりぬ、なんぢ会えせざりけり。仏法ぶつぽうもしかくのごとくなら

わしに仏法を問うことがないのだ。」

則公が云う、「私は師匠に正直に申し上げますが、かつて青峰せいほう禪師の下で修行していたとき、仏法における安楽と云う境地を理解し到達することが出来たのです。」

禪師が云う、「おまえさんは如何なる言葉によつて、その境地に入ることが出来たのだ。」

則公が云う、「私はかつて青峰せいほう禪師に問いました、仏道修行者にとつて自己とはいかなるものでしょうか、と。すると青峰せいほう禪師は丙丁ひょうてい童子が火を求めにやつてきた、と云いました。」

法眼は云つた、「良い言葉だ、しかしおそらくおまえさんはその言葉を理解していないだろう。」

則公は云つた、「丙丁ひょうていは火に属してゐいます、火をもつてさらに火を求めるといふことですから、自己をもつて自己を求めることと同じだと解釈しました。」

法眼ほうげん禪師が云つた、「全く分かつておらんのお、おまえさんは理解できていなかった。仏法ぶつぽうがもしそのようなものであつ

ば、けふ^{今日}までつたはれじ。

ここに則公^{そくこう}憐悶^{れんもん}して、すなはちたちぬ。

中路^{ちゅうろ}にいたりておもひき、禪師^{ぜんじ}はこれ天下の善知識^{ぜんちしき}、又五百人の大導師^{だいどうし}なり。わが非をいさむる、さだめて長処^{ちやうしょ}あらむ。禪師のみもとにかへりて懺悔^{ざんげ}礼謝^{らいしゃ}してとうていはく、いかなるかこれ学人^{がくにん}の自己なる。

禪師のいはく、丙^{ひやう}丁^{てい}童子^{どうじ}来求^{らいきゅう}火^かと。

則公^{そくこう}、このことばのしたに、おほきに佛法^{ぶつぽう}をさと^悟りき。

あきらかにしりぬ、自己^{じこ}即仏^{じつぶつ}の領解^{りやうげ}をもて佛法^{ぶつぽう}をしれりといふにはあらずといふことを。もし自己^{じこ}即仏^{じつぶつ}の領解^{りやうげ}を佛法^{ぶつぽう}とせば、禪師^{ぜんじ}さきのことばをもてみちびかじ、又しかのごとくいましむべからず。ただまさに、はじめ善知識^{ぜんちしき}をみむより、修行^{しゆぎん}の儀則^{ぎそく}を咨問^{しもん}して、一向^{いっかう}に坐禪^{ざぜん}辨道^{べんどう}して、一知^{いっち}半解^{はんげ}

たとしたら、今日^{今日}まで伝わることはなかつたであろう。」

ここで、則公^{そくこう}は悶々^{もんぜん}としてその場に居られなくなり、そこを去つた。しかし去り行く途中で考えこんだ、「禪師^{ぜんじ}は天下に名だたる指導者^{しうどうしや}ではないか、また五百人も弟子^{でし}のいる大導師^{だいどうし}である。私の非^ひを諫めてくれたのにはそれなりの意味があつてのことであろう」と。そして禪師^{ぜんじ}の下に帰り、非礼^{ひらい}を深くお詫^わびして尋ねた。「仏道^{ぶつどう}修行者^{しゆぎんしや}にとつて自己^{じこ}とはいかなるものでしょうか。」

禪師^{ぜんじ}が云つた、「丙^{ひやう}丁^{てい}童子^{どうじ}が火^かを求めにやつてきた。」

則公^{そくこう}はこの言葉を聞いてようやく佛法^{ぶつぽう}を悟^悟ることが出来た。明らかに分かるであろう。自己^{じこ}がすなわち仏^{ぶつ}であるという理解^{りかい}で佛法^{ぶつぽう}が分かつたと云うのではないことを。もし自己^{じこ}がすなわち仏^{ぶつ}であるということが佛法^{ぶつぽう}であると理解^{りかい}するなら、禪師^{ぜんじ}の先ほどの言葉で、すなわち前^{まへ}と全く同じ言葉で悟^悟ることはなかつたであろう、またあのような戒^{かい}めにはならなかつたはずである。ただ間違^{まちがひ}いのないことは、立派^{りつぱ}な指導者^{しうどうし}に会つて後^{のち}、修行^{しゆぎん}の仕方^{しかた}や規則^{きそく}を尋ねて、ひたすら坐禪^{ざぜん}弁道^{べんどう}し、

を心にとどむることなかれ。仏法の妙術、
それむなしからじ。

とうていはく、乾唐の古今をきくに、あ
るいはたけのこゑをききて道をさとり、あ
るいははなのいろをみてこころをあきら
むる物あり、いはむや、釈迦大師は、明星
をみしとき道を証し、阿難尊者は、刹竿の
たふれしところに法をあきらめしのみな
らず、六代よりのち、五家のあひだに、一言
半句のしたに心地をあきらむるものおほ
し。かれらかならずしも、かつて坐禅辨道
せるもののみならむや。

しめしていはく、古今に見色明心し、
聞声悟道せし当人、ともに辨道に擬議量
なく、直下に第二人なきことをしるべし。

間違つても一つの知識、生半可な理解などを心にとどめない、
そうすれば仏法の妙なる方法すなわち坐禅は決して無駄なも
のにはならないであろう。

【第十七問】質問する。インドや中国の昔からの話を聞いて
いると、ある人は石が竹に当たった音(舌)を聞いて三道を
悟ったというし、又、花の色を見て自己の真実を知った三と
いう人もいる、さらに、お釈迦様は明けの明星を見た時に真
実を明らかにし、阿難尊者は迦葉尊者から門前の刹竿旗を倒
せと言われた時に法を明らかにした、そればかりでなく、六
祖慧能禅師より後、法眼、瀉仰、曹洞、雲門、臨済の五家に
分かれる間に短い言葉をもって悟りを開いた人が多い。彼ら
は必ずしも以前から坐禅弃道をしたものだけではないだろう。
答えて云う、過去に色を見て心を明らかにし、竹の音を聞
いて道を悟った当人たちはともに坐禅修行することに何らの
躊躇いもなく、全てが自己そのものであったことを知るべき
であろう。

とうていはく、西天および神丹国は、人もとより質直なり。中華のしからしむるに
よりて、仏法を教化するに、いとはやく
会入す。我朝は、むかしより人に仁智すく
なくして、正種つもりがたし。蕃夷のし
からしむる、うらみざらむや。又このくに
の出家人は、大国の在家人にもおとれり。
拳世おろかにして、心量狭少なり。ふか
く有為の功を執して、事相の善をこのむ。
かくのごとくのやから、たとひ坐禅すとい
ふとも、たちまちに仏法を証得せむや。
しめしてはいはく、いふがごとし。わがく
にの人、いまだ仁智あまねからず、人また
迂曲なり。たとひ正直の法をしめすとも、
甘露かへりて毒となりぬべし。名利におも
むきやすく、惑執とらげがたし。しかは
あれども、仏法に証入すること、かなら

【第十八問】質問する。中国及びインドの人々はもと堅
実で曲がったところはない。中国が文化の中心であったが故
に、仏法を教え伝えようとした時に、非常に早く理解し会得
できた。しかし我が日本では昔から慈しみ深いところがなく
賢いところもなく、真実の智慧の種が積もるほどに集まらな
い。未開地であるところがそうさせているのだろうか。残念
でならない。また我が国の出家人はインドや中国の在家の人
より劣っている。世の中全体が愚かであり、非常に心が狭い。
人の出来不出来という結果にはかり執着して表面的に良いと
されるものを好むのである。このような人々が例え坐禅する
といつても、すぐに仏法を修得することが出来るであろうか。
答えて云う、その通りである。我が国には慈しみ深く賢い
人は少なく、又ひねくれていて役に立たない者が多い。例え
真っ直ぐ正しい法を教えたとしても、おいしく甘い法の味で
さえかえって毒になってしまふであろう。名聞と利欲に引か
れやすく、惑いと執着から離れられない。そうではあるもの
の、真実の教えを究めるのに、必ずしも、人間界、天上界の

ずしも人天の世智をもて出世の舟航とす
るにはあらず。仏在世にも、てまりにより
て四果を証し、袈裟をかけて大道をあきら
めし、ともに愚暗のやから、癡狂の畜類な
り。ただし、正信のたすくるところ、ま
どひをはなるるみちあり。また、癡老の
比丘黙坐せしをみて、設斉の信女さとりを
ひらきし、これ智によらず、文によらず、
ことばをまたず、かたりをまたず、ただし
これ正信にたすけられたり。

また、釋教の三千界にひろまること、
わづかに二千余年の前後なり。刹土のしな
じなる、かならずしも仁智のくににあ
らず。人またかならずしも利智聰明のみあ
らむや。しかあれども、如来の正法、も
とより不思議の大功德力をそなへて、とき
いたればその刹土にひろまる。人まさに

世間的な智慧を以て真実の世界に入るための道しるべとする
のではない。お釈迦様が生きておられた時代にも騙されて手
毬をぶつけられたが故に悟りの阿羅漢果を得た老比丘がいた
し^{三三}、戯れに袈裟を掛けて踊ったことよつて六神通阿羅漢
道を得た比丘尼^{三四}がいた、ともに愚かで大馬鹿ものであつた。
但し、真つ直ぐに信じる心があれば惑いを離れることが出来
るのである。また愚かな年老いた比丘に食事を施し、その比
丘に説法を求められたものの説法できず、ただ黙つて坐つて
いるのを見た女信徒はそれによつて悟りを開いた^{三五}、こうい
つたことは智慧によるものではなく、文字にもよらず、言葉、
語りなどでもなく、ただ正しい信心によるものなのである。

又お釈迦様の教えが三千大千世界に広まったのはわずかに
二千年程度のことである。広まった国々も様々で、必ずしも
慈しみ深く賢い人が多い国ばかりではない。また人は必ずし
も智慧に富み聡明な人ばかりではない。しかしながら伝えら
れているこの正しい教えは元々不思議な大功德力が具わつて
おり、時が至ればその国に広まるのである。人が正しく教え

正信修行すれば、利鈍をわかず、ひとしく得道するなり。わが朝は仁智のくににあらず、人に知解おろかなりとして、仏法を会すべからずとおもふことなかれ。いはむや、人みな般若の正種ゆたかなり、ただ承当することまれに、受用することいまだしきならず。

さきの問答往来し、賓主相交することみだりがはし。いくばくか、はななきそらにはなをなさしむる。しかありとも、このくに、坐禅辨道におきて、いまだその宗旨つたはれず、しらむとごころざさむもの、かなしむべし。このゆゑに、いささか異域の見聞をあつめ、明師の真訣をしるとどめて、参学のねがはむにきこえむとす。このほか、叢林の規範および寺院の格式、いま

を信じて修行すれば、賢いか愚かかに関係なく等しく道を得ることが出来るのである。我が日本は慈しみ深く賢い人が少ない国ではない。人は理解力が乏しく、仏法を理解することは出来ないと思つてはならない。ましてや人は皆、智慧の正しい種を豊富に持つてるのである。ただ仏法を正しく受け継いで真実の生き方をすることはまれであり、それを自分のものとして享受するには至つていないだけなのである。

これまで質疑応答を繰り返し、質問者になつたり回答者になつたりしてきたことは如何であつたかと思う。華のない空に華を作つていたようなものではなかつたであろうか。そうであつたとしても、この国には坐禅弁道について未だにその宗旨が伝わつておらず、知ろうと志す者にとつては悲しむべきことである。この故に、すこしばかりではあるが外国で見聞を集めて、眼の開いた指導者の真の秘訣を書きとどめて参学を望む学僧に教えようと思う。この他、修行道場のきまり、寺院の格式など今示す時間がないが、それらは決して

しめすにいとまあらず、又草草にすべからず。

おほよそ我朝は、龍海の以東にところとして、雲煙はるかなれども、欽明用明の後より秋方の仏法東漸する、これすなはち人のさいはひなり。しかあるを名相事縁しげくみだれて、修行のところにわづらふ。いまは破衣綴盃を生涯として、青巖白石のほとりに茅をむすむで、端坐修練するに、仏向上の事たちまちにあらはれて、一生參学の大事すみやかに究竟するものなり。これすなはち龍牙の誠教なり、鷄足の遺風なり。その坐禅の儀則は、すぎぬる嘉祿のころ撰集せし普勸坐禅儀に依行すべし。

それ仏法を国中に弘通すること、王勅をまつべしといへども、ふたたび靈山の遺

軽々しく取り扱うものではない。

日本という国は龍のすむ大海の東に位置して、雲や霞のはるか彼方にあるが、欽明天皇^{二六}や用明天皇^{二七}の時代より西方の仏法が東方に伝わってきたことは、人々の幸いである。しかしながら、今の仏道は教義の名目や儀式が煩瑣で、修行するにあたってはなはだ煩わしい。今は破れた袈裟と粗末な度量器のみを生涯の友とし、苔むす山奥で茅の粗末な庵を作つて端坐修練し、よつて悟りを得た仏がさらに修行し仏が更なる仏になるという事が実証され、一生が修行であるという人生の大事を極める決心ができるのである。これは龍牙居遁禅師^{二八}の誠めであり、摩訶迦葉尊者が残した修行の教えである。その坐禅の規則は以前、嘉祿（一二二五～一二二七年）の頃編集した普勸坐禅儀に載せてあるので、それに倣うがよい。

そもそも仏法を国中に広めることは帝の勅命を待つべきだとは云うものの、改めて靈鷲山でお釈迦様が遺された仏法を

囑ぞくをおもへば、いま百万億ひゃくまんおくせつ利に現出せる王公相將しやうしやう、みなともにかたじけなく仏勅ぶつじくをうけて、夙生しゆくしやうに仏法を護持する素懷そかいをわすれず、生来しやうらいせるものなり。その化をしくさかひ、いづれのところか仏国土ぶつこくどにあらざらむ。このゆゑに、仏祖の道どうを流通るつうせむ、かならずしもところをえらび縁えんをまつべきにあらず、ただ、けふ今日をはじめとおもはむや。

しかあればすなはち、これをあつめて、仏法をねがはむ哲匠てつしやう、あはせて道をとぶらひ雲遊萍寄うんゆうひやうきせむ参学さんがくの真流しんるにのこす。ときに、

寛喜辛卯中秋日 入宋伝法沙門道元しんろす記

辨道話

広めよという委囑いごを考えるならば、今百万億の国土に出でている王、大臣、將軍たちはみな共に有りがたいことに、お釈迦様の勅命を受けて前世から仏法を護持するという本来の志を持ち、今の世に生れてきているのである。その力がおよぶ範囲に於いてはどこが仏国土でないところがあるか。この故に仏祖の教えを広めるにあたり、必ずしも場所を選び、時期を待つ必要があるか、ただ今日が最初の日であると思うことにしよう。

以上のようなことから、これ等のことを書き集めて仏法を乞い願う哲人や、あちこちを雲の如く彷徨たぐひっている参学の志を持つ人に残すのである、時に

一二三一年八月一五日、宋に入り、仏法を伝えた沙門道元が記す。

弁道話

註

- 一 仏樹房明全（一一八五～一二二五）、榮西の高弟
- 二 菩提達磨大師（五三六）
- 三 神光慧可（四八七～五九三）
- 四 六祖慧能（六三八～七一三）
- 五 南嶽懷讓（六七七～七四四）
- 六 青原行思（七四〇）、
- 七 法華経方便品
- 八 過去七仏、毘婆尸仏、尸棄仏、毘舍浮仏、拘留孫仏、拘那含牟尼、迦葉仏、釈迦牟尼仏
- 九 靈雲志勤（？） 瀉山靈祐の法嗣
- 一〇 香嚴智閑（一八九八） 瀉山靈祐の法嗣
- 一一 法華経方便品
- 一二 因縁 無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死。
- 一三 欲界に四惡趣（地獄、餓鬼、畜生、修羅） 須弥四州（南瞻浮洲、北俱盧洲、西牛貨洲、東勝身洲） 六欲天。色界に七有（四禪天、大梵天、無想天、阿那含天）。無色界に四空処天。
- 一四 行住坐臥（ぎようじゆうざが）、行く、止まる、坐る、ふせる。
- 一五 南陽慧忠（七七五） 六祖慧能の法嗣
- 一六 彌師、石翠慧藏、馬祖道一の法嗣、
- 一七 樵、六祖慧能
- 一八 釈尊入滅後の五百年を正法、その後の五百年を像法、像法後の一万年を末法という。
- 一九 金陵報恩玄則、法眼文益（八八五～九五八）の法嗣
- 二〇 丙は火の兄、丁は火の弟
- 二一 香嚴擊竹
- 二二 靈雲桃花

- 二三 雜宝藏経九
- 二四 大智度論一二
- 二五 雜宝藏経九
- 二六 欽明天皇（五七二）
- 二七 用明天皇（五八七）
- 二八 龍牙居遁（八三五～九二三） 洞山良价の法嗣

参考文献

- 寺田透・水野弥穂子註 日本思想体系「道元」岩波書店
 - 水野弥穂子校註正法眼藏 岩波文庫
 - 水野弥穂子 正法眼藏 春秋社
 - 神保如天・安藤文英 正法眼藏註解全書
 - 西尾実 正法眼藏弁道話 筑摩書房
 - 澤木興道 正法眼藏講話 大法輪閣
 - 西谷啓治 正法眼藏講話 弁道話 筑摩書房
 - 西有穆山 正法眼藏啓迪 大法輪閣
 - 樽林皓堂 正法眼藏講讀 青山社
 - 石井恭二 正法眼藏 河出書房
 - 伊福部隆彦 正法眼藏新講黎明書房
 - 原田祖岳 禅と人生 原書房
 - 柴田道賢 弁道話私講 東方出版
 - 桜井文隆 辨道話の研究 ビーエス出版部
 - 安谷白雲 弁道話 春秋社
 - 衛藤即應 正法眼藏序説 岩波書店
 - 内山興正 正法眼藏を味わう 柏樹社
- 二〇一三年九月一六日
- 訳者 金子勝俊 東京都狛江市在住
 東京都世田谷区耕雲寺坐禅会会員